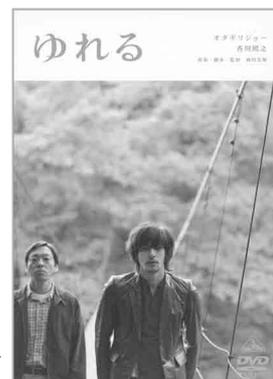


## 『ゆれる』

2006年／日本／西川美和監督作品

実直で優しい兄の内面の葛藤、  
ゆれながら自分なりの真実を見出す弟

会員 園山 佐和子 (60期)



『ゆれる』  
発売元：バンダイビジュアル  
価格：3,990円(税込)

東京で写真家として成功した早川猛は母の一周忌で久しぶりに帰郷し、実家で父と暮らしている兄の稔、幼なじみの智恵子との3人で近くの渓谷に足をのばす。だが渓谷にかかった吊り橋から流れの激しい溪流へ、智恵子が落下してしまう。その時そばにいたのは、稔一人だった。事故だったのか、事件なのか。裁判が始められるが、次第にこれまでとは違う一面を見せる兄を前にして猛の心はゆれていく。

映画の中では、現場で猛は何を見たのか、何を聞いたのか、そして真実はどうだったのかは明らかにならない。猛自身の記憶も「ゆれる」のである。そして、ゆれながらも最終的に猛なりの真実を見出して行く。この映画では、実際に何が起こったかは大きな問題ではない。問題は猛と稔の関係性だからである。

実直で優しくかった兄の、知らなかった面が次々と明らかとなり、動揺する猛。猛が証人尋問で述べる「僕の兄を取り戻したい」という言葉は、稔のドロドロとした

人間臭い内面を見たくなかった、以前のように実直で優しい兄のままでいて欲しかった、ということではないだろうか。しかしそれは稔と表面的にしか関わりたくないということに過ぎない。都会で自由に生きる弟をうらやんだり、鬱屈した日常の唯一の慰めである智恵子に執着したりする、それらも含めて稔という人間なのだから。

内面に様々な葛藤を抱えつつも真面目に生き、他人に優しく接することができるのが稔という人間であること、そして自分がその兄の優しさを踏みにじってきたこと、猛がこのことを本当に理解し、ありのままの稔を受け入れることができるようになるためには、7年という年月が必要だった。ラストシーン、そんな猛の心を受け止めたかのような、少し複雑な稔の笑顔。

この映画では、一シーン、一シーン、また台詞の一つ一つにまで人物が細かく丁寧に描かれていることも特筆すべきである。撮影当時まだ30歳前後だったらしい西川美和監督の人間観察力、洞察力に驚かされた。